

雜 報

米國でも海中の重力測定決行

從來、地球上の重力を精密に測定することは殆んど専ら陸上に限られ、海上では、ヘカー O. Hecker 博士が1900年頃、遠洋航海の船中で可なり不精密な測定を實行したに過ぎず、到底之れを陸上の觀測結果と合せて地球の形狀なきを研究するに足らざるものであると一般に思はれてゐた。しかるに、オランダ國の F. A. Vening Meinesz マイネツ博士が、1923年頃から海軍潛航艇を使用して、海面より數十尺深いあたりの極めて靜かな海水中で振子による重力測定を發案し、1926年頃までには大西洋印度洋太平洋等に於いて幾度もなく、航海しつつ測定を實行し、全世界の測地學者の大なる賞讃を博してゐる。此のマイネツ氏の好結果を見習つて我が日本でも近海上の重力測定を試むべしと、田中館博士等は數年前から主張して居られるけれど、我が國では未だ此の機運が熟しない。しかるに聞くところによれば、米國測地局 Coast and Geodetic Survey の測地學部長ボー井ー W. Bowie 氏の奔走により、今秋から此の海上の重力測定を實行することとなり、先づオランダからマイネツ氏を招聘して、海軍省より潛航艇 S21 號を借りうけ、三つの航路に沿ふて、試験的測定を開始した。去十二月に此の試験的測定から一先づ引き上げたマイネツ氏は、ワシントンに於いて米國內の此の方面の諸問題に興味を有する學者たちに講話を試みるに同時に、マイネツ氏は自ら使用してゐる特殊な重力測定器械の理論と構造及び使用法等を説明した。此のマイネツ氏に教へられた米國の測地學者が、近い將來には遠洋に乗り出して、ひろい海上の重力觀測をやることになるだらう。因みに、米國が今般マイネツ博士を招いて指導を受けるのは、カーネギー財團の援助によるものである。〔Sc. 1764〕

京都大學天文臺の新機械

京都の天文臺に去る十月、ドイツのバンベルヒ會社から口径90ミリの大子午儀が到着した。そして十一月の公開日に展覽された。尙ほ同天文臺には

近々英國クラブ會社から「16吋」に「12吋」に二つのシーロスタトが到着する筈。

太陽黒點と無線電波

米國ハーバード大學の天文學教室では主任教授ステツソン H.T. Stetson 氏の主唱により、無線電波に與へる太陽黒點の影響を研究するため、ボストン市の無線技師ピカード Pickard 氏の考案に成る見事な受信セットを設備した。今後、此の教室は絶えずシカゴ市の WBBM 放送局から放送される電波の強さ弱さを精密に測定するに共に、一方に於いて、天文望遠鏡により、太陽黒點を撮影して、其の形狀や數を記録し、日々相比較するのであるといふ。(E. & A. M. 103)

花山天文臺の工事進捗

京都大學天文臺の移轉先なる花山天文臺の新建築工事は目下順調に進んでゐる。十一月末までに太陽館のコンクリートが殆んど終り、今は大小の兩ドーム及び本館のコンクリート工事の最中である。電話も既に架けられた。多分來る四五月頃には建築が完成し、夏には移轉が終るのであらう。因みに此等の建築は東海道鐵道線の列車の窓外に見えてゐる。

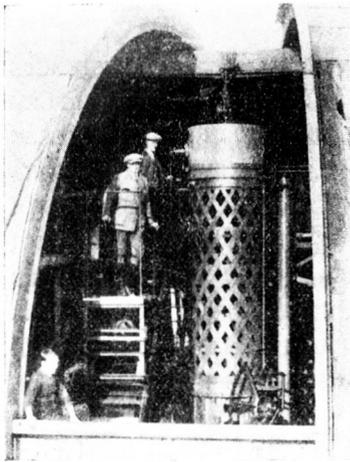
ロンドンのユニヴシチ・カレジ天文臺

英國ロンドン市北郊ヘンドンのミルヒル公園に新しく天文臺が目下建設中である。之れは同市ユニヴシチ・カレジ大學のものであつて、かつて W. E. Wilson 井ルソン氏の所持してゐた大型の望遠鏡をこゝに据え付けるのであるといふ。

デトロイト天文臺へ參拾萬圓

米國ミシガン大學のデトロイト天文臺は前の臺員 O. B. Wheeler の未亡人から十五萬ドルの寄附金を受領した。之れは同天文臺の研究結果出版費及び研究員の補助に用ゐられる由。(Sc. 1764)

ロシア天文學會



ロシア國の天文學界は此の頃實に大變な奮發ぶりである。歐洲大戰に引きつづいて幾度も起つた國內革命のため、暫く天文研究などは忘れられ、天文家たちは多く外國に避難する有様であつたが、1924年頃からは政情が安定すると共に、サビエト政府が一般に自然理學の研究を獎勵したため天文學も俄然盛んになつた。ブルコワやカザンあたりの古い天文臺が甦つたばかりでなく、モスコウやレ

ニングラドには新しい天文學會や天文臺が作られ、彗星や流星や變光星などの觀測に専門家やアマチュアたちが見事な成績を擧げる様になつて、諸外國を驚かせてゐる。中にも、最も驚嘆すべきは南方ロシアに於ける二三の天文臺に設備せられた大望遠鏡である。——こゝに寫眞として掲げたのはクリミア半島の南端にある有名なシメイス天文臺に最近設備された口径百センチの大反射鏡である。此の器械は歐洲大戰前のロシア帝政々府が英國グラブ會社に注文して置いたものであるが、革命で帝政々府が倒れたため、グラブ會社では此の大反射鏡を一時賣り物に公告したものであつた。ところが1923年になつてサビエト政府が大金を拂つて之れを買ひ取り、シメイス天文臺に据えつけるに至つたので、各國を驚かせた。今之れは徑32尺の大ドームの中に納まり、毎夜、星の寫眞撮影に用ゐられてゐる。寫眞は据え付け最中の反射鏡であつて、二人の觀測者が其のニュートン式觀測臺の上に立つてゐる有様である。ドームの大きさや其のスリット(長窓)の大きさなども、人の身體と比べて大體知られる。

宇宙の中心位置の新決定

去る十一月21日、大阪毎日新聞社へ米國ニューヨークから下の如き電報が到着した。

201530 AT AUTUMN MEETING NATIONAL ACADEMY SCIENCES WHICH OPENED UNION COLLEGE PROFESSOR HARLOW SHAPLEY HARVARD OBSERVATORY DECLARED THAT CENTER UNIVERSE BEEN DISCOVERED BY ASTRONOMICAL OBSERVATIONS EXTENDING NUMBER YEARS STOP COMPUTATIONS LAST MONTH SHOWN CENTER TO BE ABOUT 47000 LIGHT YEARS AWAY FROM SUN STOP IN COURSE STUDY ABOUT 1000 NEW VARIABLE STARS FOUND IN PAST YEARS STOP CENTER NUCLEUS OF EARTH'S GALAXY STARS WHICH IS HEAVENLY UNIVERSE BEEN LOCATED IN CONSTELLATION SAGITTARIUS STOP IMPLICATION THIS DISCOVERY IS THAT MILKYWAY IS ALL ONE GREAT GALAXY STARS SHAPED LIKE TWO PLATES PLACED FACE TO FACE WITH EXTENSIVE MASSIVE NUCLEUS WHICH IS FIVE KILOPARSECS IN THICKNESS STOP IN ASTRONOMICAL CALCULATIONS ONE KILOPARSEC IS APPROXIMATELY 3200 LIGHT YEARS FIGURING LIGHT TRAVEL AT RATE 186000 MILES PER SECOND SUZUKI KG 21 AM 8 56

二十二日の午後、大毎の松井氏が此の電文を持つて意見を聞きに來たので、読んで見たところ、意味は

二十日15時30分發信、ユニオン學院で開かれた國立理學アカデミの秋季會合に於いて、ハーバード大學天文臺のハーロー・シャプレイ教授が發表した所に據ると、幾年にも渡る天體觀測によつて、宇宙の中心が発見された。昨年終了の計算によれば、此の宇宙中心は我が太陽を去る約47000光年のかなたにある。之れは過去數年間に見付けられた約一千個の新變光星の研究の結果である。地球から「天の河」に見えるかの天の宇宙の中心核は射手座星座の中に位置してゐるのであるから上記の発見の意味は、即ち、「天の河」は二枚の薄い板をヒツタリと合はせてやうな形に出来てゐる一大群星であつて、厚さは5キロパーセクもあり、中心は大きく、質量も多い。天文計算に於いて、一キロパーセクとは、毎秒186000マイル走る光線が3200年間に走る距離を言ふ。鈴木。

宇宙の中心については、過去十數年にわたつて多くの學者たちの研究があつた。最近にも、シャプレイ博士が球狀星團の分布から之れを研究し、

又、井ルソン山のシーレス博士が星數調査から之れを研究した。そして誰もが皆、此の大宇宙の中心は射手星座の方向にあるといふことを疑はなかつた。上記の電文によつて、約一千個の新變光星の研究から、シャプレイ氏は太陽から宇宙中心までの距離を 47000 光年と測定したのであつて、之れは今まで或る人々に見積もられてゐた「約20000パーセク」即ち、「約60000光年」といふ數字よりも更に正確なものであらう。(山本)

人 事 消 息

オープンハイム教授の死 澳國ギーン大學教授オープンハイム S. Oppenheim 氏は去る八月15日逝去した。享年71。氏は1882年から同大學天文臺員となり、1911年に教授となつた。研究は理論的方面が多い。

新しいギーン大學天文臺長 永くドイツ國ハムブルヒ天文臺（ベルゲドルフ村）の一員として 60-cm の大屈折赤道儀により觀測研究を續けてゐたグラフ K. Graff 博士は、去る夏以來、澳國ギーン大學に招かれて、さき頃逝去したヘベルガー氏の後をつぎ、天文臺長となつた由、同博士から我が山本博士の許へ書信が達した。

米國天文學會々長新選 去る九月初旬、米國アマスト大學天文臺で開かれた米國天文學會第40回總會に於いて、コムストク會長（「天界」第88號参照）引退し、代つて、エール大學の數理天文學教授ブラウン E. W. Brown 氏が新しく會長に選ばれた。ブラウン氏は月の運動に關する世界隨一の權威者であつて、さきに東京の平山清次博士が師事されたところある人である。

ギーン博士の逝去 ドイツ國ミュンヘン大學の物理學教授ギーン W. Wien 博士は、去る八月30日、60歳を以つて逝去した。氏は理論物理學の大家であつて、「ギーンの法則」及び「ギーンの變位法則」等は光線放射學上に於いて有名なものであるし、此等の法則は今日天體物理の研究のために用

ゐられて、吾人は遠い恒星の温度を知る方法を與へられてゐる。

ニウチール博士引退 英國ケンブリヂ大學附屬太陽物理研究所長ニウチール教授は近々に引退する由。同氏は父 R. S. Newall の後を繼いで早くも1890年同大學に寄贈された「25吋」ニウチール望遠鏡の主任者となり、爾來此の大學が新しい天文研究の一大中心となつたのであつて、更に1907年にはマクリン F. McClean 氏の寄附によつて「60吋」焦點ミシーロスタトを有するリトロ式の分光機を設備し、翌1908年には英國に於ける分光學の開拓者ハギンス W. Huggins の使用した望遠鏡や諸器械をローヤル學會から譲られ、又、1911年にはロンドン市の南ケンシントンにあつたロキア Sir N. Lockyer 氏の太陽研究所を此所に合併したので、ニウチール氏の研究室は益々完備した。従つて、近年英國に於いて天體物理學や太陽物理學を修める者は殆んど皆ニウチール氏の指導を受けない者は無い有様であつた。我が國にもかつて此のニウチール氏の教導を受けた人士が二三人ある。

若きプラスケト氏 英領カナダのギクトリア天文臺長プラスケト老 J. S. Plaskett の子息 H. H. Plaskett 氏は今までギクトリアの父の許に助手として働き1922年以來、早期星殊にO型星の研究によつて世界に名を掲げたが、昨夏、米國ハーワード大學に招聘されて、天體物理學教授となつた。今35歳である。

上田 穰助教授 さきに荒木助教授の海外留學任命のこゝを記したが、去る十二月14日附を以つて本會副會長上田穰助教授も文部省在外研究員として米國へ派遣される旨、官報で發表された。兩氏のため慶賀の至りである。因みに、荒木氏は一月中旬出帆の鹿島丸で渡歐。ドイツ國ゲチンゲン大學に赴かれる由。又、上田氏は多分三月頃出發、米國カリフォニア大學天文台に赴かれる由。何れも満2ヶ年の豫定であるから、歸朝は共に1931年(昭和6年)だろう。